

〔特集〕「比較思想は現代に何を貢献しうるか」¹⁾

アナロギアの論理と現代世界

——多様性と調和の学的創造に向けて——

酒 井 潔

はじめに——問題の所在、主題の設定

西洋合理主義の伝統に属するG・W・ライブニッツの哲学思想に、東洋の、華厳経に対応する面のあることをいちはやく見抜いたのは、村上俊江であった。村上が明治二九年、東京帝国大学に提出した卒業論文『ライブニッツ氏ト華厳宗』を読むと、「ライブニッツ氏ノ元子論ト、華厳宗ノ事々無礙論ト殆ンド異ナルコトナキヲ了スベシ」というその論旨もさることながら、彼の『モノドロジ』（ドイツ語訳）の理解の正確さには驚嘆させられる。村上の試みはそれ自身、比較研究を含んでおり、東から西への比較思想と言えよう。⁽²⁾

しかし既にライブニッツ自身も、西から東へ、すなわち中国の哲学・宗教・文化に積極的な関心をもち続け、イエズス会宣教師

達 (Grimaldi, Bouvet 等) を通じ詳細な実証的知識を有していた。彼は、理—氣—太極という朱子学の体系や、また易の陰陽原理の内に、自らの「モノアド」や「予定調和」への、そして0と1の二進法への対応を見出すのである。ライブニッツのいわゆる中国学の概要については、昭和四年に出た五来欣造の『儒教の独逸政治思想に及ぼせる影響』以来、日本でも少しずつ紹介されてきている。

本稿では、しかし、彼のそうした中国学の内容を叙述するのではなく、ライブニッツがそのように比較思想を遂行する場合の、むしろその方法的な論理について考察したい。そして、そのことを通じて現代における比較思想の可能な貢献について展望しよう。峰島旭雄教授は『Comparative—phenomenological Method—An Essay on the Methodology of Comparison』と題する論文におい

て、「比較」は常に主観と客観の二面をもつが、従来、看過されがちであった主観の面こそ重要であり、「比較」を厳密なものたらしめる、と述べておられる³⁾。そうだとすれば、ライブニッツの「アナログア」こそ、かかる「比較」の論理をまさに主観面について方法論的に、現象学的に反省させる概念であるといえよう。そして、見通しをあらかじめ言うなら、もしライブニッツが比較思想の先駆者であるとしても、それは中国学が彼に存在するからというよりも、むしろ彼の多方面にわたる比較、学際、歴史研究を貫く、その方法論としての「アナログア」論理のゆえである、と言っても過言ではないであろう。

I ライブニッツにおける

「アナログア」概念の規定

ライブニッツによれば、そもそも存在者（実体≡モノイド）の他者への関係は因果関係などではなく、「表出」（*expressio*）の関係である。どの個体も、そして個体についての認識も、そのなかに他の存在者、ひいては全世界、およびその認識（≡観念）を「表出」している。では、「表出」とはいかなる関係であるか。スピノザを批判し、観念の能動性を主張した前期の論文『観念とは何か』（1678）において、「或るものを表出するとは、『表出する側のものが』、表出されるべき事物の諸条件に対応する諸条件を持つことである」（*GP. III, 263*）と定義される。その際大事なこと

は、「表出するものが表出されたものに似ている（*similis*）必要は明らかになく、『ただ』何らかのアナログア（*quaedam analogia*）が保たれていれば、それで『表出関係の成立には』十分だ」と言明されている点である（*ibid.*）。かくて「表出」の関係は「アナログア」のそれである。

しかし注意すべきは、ライブニッツがここで言う「アナログア」は、通常のように「類比」と訳されてはならないことである。なぜなら、類比とは本来「類」や「種」、あるいは「形相」において似る、つまり類・似を意味するが（例えば子は親に「人間」という類または種において似るといわれる）、ライブニッツは、認識論・存在論に関してはノミナリズムの立場をとり、類や種という普遍の自存を認めぬからである。だから彼にとって「アナログア」とは、そのギリシア語源（*analogos*）どおり、「似ている」というより、むしろ条件やシステムのあいだの「対比」（*contrastio*）を意味するのである。⁴⁾「ヨーロッパ人が（*a*）」と呼んでいるものを、中国人は（*b*）」と呼ぶ」という言い方をライブニッツがするとき、それは（*a*）」と（*b*）」のあいだに、或る対比（*contrastio*）⁵⁾があるとき、すなわち「恒久的法則的關係」（*GP. II, 112*）が存するという意味であり、そこでは「類型」も「理念型」も必要としない。さらに「表出」の関係には、多様なものがある。ライブニッツがそこであげる実例は、機械の模型と機械そのものの、平面図と立体、演説と思考、記号と数、そして代数方程式と円（また

は他の図形)であり、一方の諸条件の考察から他方の特質の認識を得ることができる。

II 「アナログア」論理と

ライプニッツの比較・歴史研究

類似に制限されぬ対比としての「アナログア」は、いま改めてこれを見ると、ライプニッツの狭義の哲学のみならず、この「十七世紀の万能人」の広範囲で学際的な研究・活動のなかに、いかに活かされ、展開されているかがわかる。四点に絞って述べておこう。

1 「連続性の原理」に関して。「表出」概念は、ライプニッツにおいては、同時に「連続性の原理」とも連関している。⁽⁶⁾つまり世界において、神から、人間、動物、植物、下等生物にいたる異なったモナドは、それらがいずれも「一における多の統一」という体制をもつ以上、必ずそこに中間的な形相が介在し、かくして「自然は飛躍せず」と主張される(GP. II, 158)。したがって、多様な各生命体のなかに、一における多の統一という構造、すなわち「表象」作用に対応する条件を確認する作業が重要となる(GP. V, 126)。ライプニッツは、植物、昆虫の「アナロジー」の探究を繰り返して肯定し、これをもたらし「比較解剖学」*l'anatomie comparative*に文字どおり言及しているのである(GP. V, 455)。

2 「連続性の原理」と絡んで、「アナロジーの規則」(*la règle*

de l'analogie)はさらに「われわれの観察の実証が及ばぬもの(例えば別の天体上の物体)の推測にも「蓋然性」(*probabilité*)を保証し、そのことにより蓋然性は「合理的仮説」の基礎であるとライプニッツは述べている(GP. V, 463)。これはカントが『純粹理性批判』の後半で、理性の「仮説的使用」を要求している経緯と考えあわせ、興味は尽きない(B797-810)。「アナログア」は発見術 *ars inveniendi* として、われわれの認識を拡張するという、実践的な性格をも帯びる。

3 「アナログア」は、特殊を手がかりとして特殊を知ることにおいて、また歴史学 *historia* の方法でもある。ライプニッツが生前刊行し、好評を博した史料集のひとつ『歴史補遺』(*Accessiones historicae*, 1698-1700, Dutens, IV, p. 53)の第一巻序文で、歴史研究に期待するものの第一に、「特殊なものを知る喜び」があげられている。つまり事実真理(永遠真理と異なり、その反対も可能である)としての歴史的真理への奉仕ということが示唆され、これが近代歴史学の理念と隆盛を可能にする。「特殊なもの」を認識する彼の「アナログア」論理は、後にマッソン・ウルセルがその『比較哲学』(1923)で、方法論としての、横から横へ、特殊から特殊へ推論するアナロジーの論理を明示していることの、その先取りとも言えよう。⁽⁹⁾

4 「類似」ではない「アナログア」は、当然「可感的事物と非可感的事物とのそれ」をも含んでくるが、このことが「人間知

性新論』Ⅲ「言葉について」の冒頭での、場所的概念に由来する前置詞は、場所的關係に比例した意味をもつ云々、の考察に活かされている。さらにライブニッツは、自然言語における意味の实在論を展開し、古今東西の比較言語史的な知識を誇示する。しかしそれは、言語現象の多様の根源に或る共通的なものを見出そうとする態度に基づき、単なるディレッタンティズムからではない(GP. V, 267-65)。

Ⅲ 比較思想の自己検証

しかしながら、多様な觀念のあいだの対応は、また安易な無差別や恣意的な思いつきからは区別されねばならぬ。まず比較が専らその対象に関わる場合、ライブニッツはいまあげた『新論』での比較言語史的な研究、なかでも語源探索について、「きちんとした確証なしに」、「安易な飛躍をしてはならない」と戒めている(GP. V, 264)。こうした〈実証的な比較〉は、実際に資料を手しさえすれば、正当化されることが出来る。したがって、例えば、儒教をめぐるライブニッツの知識は、二次資料、それも宣教師という偏った資料にしか基づいていないという類の批判は、あまり意味をもたない。そのような欠如は、仮にライブニッツがもっと別の資料に当たれば、容易に修正され得たであろうからである。むしろ、たまたまどのような資料に接したにせよ、そこから異なる現象の対応を判定する能力、すなわちアナログアの論理を彼が

備えていたことの方が、はるかに重要である。

これに対し、「アナログア」の正当性が、比較を遂行する主体に関わる場合、ここにライブニッツの論理学ないしは「普通学」が、新たに比較思想に対してもつ課題が存するのではないか。彼がそもそも永遠真理と事実真理を区別し、矛盾律に充足理由律を対置したのは、数学や(狭義の)論理学のみならず、歴史的命題をも真理の領域に含もうとしたことによる。だがそのためには命題ないし觀念はあらかじめ「分析」され、その構成要素のあいだに矛盾がなく、「可能」であることが示されねばならぬ。つまり矛盾を内包するような認識は排除されねばならないわけである。そうしたうえで、真なる命題(*propositiones verae*)が「証明」されることは、主語の中に述語が、前件の中に帰結が含まれていることを明示することである(GP. VII, 43-46)。異なった諸現象のあいだに、恣意的ではない対比を結論し得るためには、比較の主体は、同時にいわば禁欲的に觀念の可能性そのものを検証する必要があるだろう。

ところで、表出をとおして多様な対比關係を肯定し、それにより比較思想する主観は形而上学的に見ても、ライブニッツの言うように、一定の「視点」(*point de vue*)に依存せざるを得ない。神ならぬわれわれの主観は身体と結合され、そのことよって一定の「パースペクティヴ」(*perspective*)をもつ。『形而上学叙説』第九節における「同一都市の比喩」が示すように、同一世界

を表出するモノダが、個性や多様性を得るのは、この「パースペクティヴ」という概念にも基づく。これは、クザーヌスでも萌芽的に見出され、世界を対象化し自らに従わせようとする近世的主観の特徴でもある。しかしわれわれの比較思想は、その際、己の観点を絶対化しただけの自己抑制を求める。ライブニッツでは、「パースペクティヴ」が必ず死角を伴うことに基づく「形而上学的悪」という概念がこれに当たる。

IV 比較思想からブラクシスへ

異をどこまでも異として確保しつつ、そのあいだの調和を保証する「アナログア」論理は、ライブニッツの場合、さらに単に学問上の方法であるばかりでなく、彼の終生のテーマでもあった「一と多」に関わる。そしてそのことによって、比較思想は、単なる比較のための比較でも、理論的観照でもなく、まさに切実な〈実践〉の問題に直結していた。

1 教会再統一の問題…ライブニッツにとって、比較思想は、全欧州的に対立抗争にあったプロテスタントとカトリックを和解させ、分裂したキリスト教世界に再統一を実現するという課題に結びついていた。「対応」や「一致」という論理的・哲学的概念は、現実世界にその表現をいつでも見出ししていたのだ。ライブニッツの提案は、寛容を旨とし、教会の統一を、「一様性」から区別し、むしろ多重で異なる部分の「調和」によってこれを実現しよ

うというものであったが、しかしボシユエの頑なな拒絶を前に挫けざるを得なかった。

2 ヨーロッパの政治的平和…マインツ選帝侯やハノーファー王家に仕えたライブニッツは、種々の政治や政治改革のアイデアを献策したが、これも多数の小勢力が分裂・抗争し、帝国の地位と平和が（隣国フランスなどから）脅かされることへの、彼の現実の危機意識より発している。一例をあげると、皇帝の至高性と諸侯の権限とを矛盾させず、両立させようとした彼の構想は、今日の「連邦制度」に当たるもので、漸く彼の死後になって、アメリカ合衆国で、そして今世紀ドイツ連邦共和国において実現した、といえる。⁽¹¹⁾

3 アカデミーの建設…一七〇〇年三月ブランデンブルク選帝侯によってベルリン天文台・科学協会が認可されたが、この設立計画へのライブニッツの覚書からうかがえるのは、理論と実践の総合への、そしてこれにより文芸や学問のみならず、国家と国民の利益となることへの期待である。そこでは数学と物理学を中心とし、それぞれに四部門が配属された。彼は、学問の多様とその有機的統一、そして〈学際的〉研究への道を拓くために、多方面の情報連絡、そして協会事業を支える財政などに尽力したのである。⁽¹²⁾

結語——アナログア・比較思想・現代世界

教会再統一へのライブニッツの努力が失敗に終わった理由として、当時の国益優先の冷徹な政治力学のほかに、両教会の神学的な差異が（教義そのものにもまして）大きすぎたことや、党派間の和解への原理的反対の存在（*Prälaten* 達）等があげられる。けれども境界や対立をよりは強調しないライブニッツの思想は、今日のカトリック教会のエキクメニカルな自己認識（*Karl Rahner* 等）と大いに一致する面をもっている、と言われる。⁽¹³⁾

ところで、九〇年代に入って、政治・社会では統一的な方向が力を失い、思想においても脱構築、相対主義、脱規範主義が優勢である。強大な全体主義国家は崩壊し、独立国家共同体となった。ヨーロッパ統合も、ここへきて各構成国に、全体に対する個性や自己主張の比重が過剰に意識され、不透明感を増している。それどころか旧ユーゴスラヴィア地域の民族抗争や宗教対立は、新旧教徒間の抗争や有力諸国の戦争に明け暮れた十七世紀とどれだけ違ふといえようか。異を異として承認しつつ、至る所に「調和」的統一を志向し、縦横に「比較」*ver-gleichen* を可能ならしめる「アナログア」論理が、今日再び要請されてならないように思われる。そもそも「ヨーロッパ」とは、ライブニッツにとって、単なる地理的呼称であるどころか、「一における多」としての「モナド」概念の、文化・社会・政治的表現であった。中国も、

ライブニッツにとつては「東洋のヨーロッパ」⁽¹⁴⁾（*quaedam orientalis Europa*）であり、それだけ「身近」な主題でもあり続けた。彼の中国学は単なる異国趣味の発露でも、ヨーロッパ中心主義の投影でもない。ライブニッツはイエズス会宣教師達と違つて、「対応」を超えて「同一」まで求めはしなかったのである。

さて、特殊の認識に価値を置く比較思想は、すぐれて歴史研究でもあるが、同時に「悪しき相対主義」や「無気力」とたたかねばならない。そしてこの場合も「多様性」と「調和」との緊張に満ちたその都度の思想的営為を支える論理は、「アナログア」以外には非現実的であるように思われる。いわゆる現代思想の諸潮流は「ニーチェ・ハイデッガー・フランクフルト学派・ポスト・モダン・コミュニケーション理論等」⁽¹⁶⁾、いずれも近代批判に立ち、他者性と多数性を標榜しているが、われわれの比較思想は、「多様性」と「調和」を根本的な価値範疇としつつ、しかしそれらの現代思想の多くが直面している没価値主義や、偽装されたニヒリズム、あるいは現実傍観的な科学主義にも陥ってはならないであろう。つまり、その《比較》——異のなかに対応をみとめるという働き——の遂行——ということ自身が、学という見地から（自己抑制的に）問いなおされ、吟味されねばならない。そうだとすれば、ライブニッツの「アナログア」の論理は、われわれに事象のあいだの「一致」ということのその実質について、改めて基礎からの反省を提示しているかぎり、今日既に一定の市民権と成果

を獲得している比較思想にとって、そのさらなる可能性と現代的射程を示しており、十分に考慮されてよいと思われる。

- (1) 川田熊太郎監修、中村元編集『華嚴思想』法蔵館、一九六〇年、四六八頁。
- (2) 中村元「なぜ奴隷の学問か——わが国における思想研究の反省——」『比較思想研究』一七号、九頁参照。
- (3) 大正大学比較宗教哲学研究会編『比較思想』第四号、一九六八年、II—III頁参照。
- (4) キリシテ語の λόγος には、proportio (対比) ratio (比例) 等の意味がある。ちなみにトマス・アクィナスも、伝統を意識しながら、analogia を〈関係〉とか〈対比〉と解し、かれの analogia entis の思想に用いている。Summa Theologiae, I, q. 43 を参照。
- (5) G. W. Leibniz, *Lettre de M. G. de Leibniz sur la philosophie chinoise, à M. de Remond*. In: Durens (Hrsg. v.) *Opera Omnia*, Genève 1768. Nachdr.: Hildesheim 1989, IV, p. 188.
- (6) 「連続性の原理」にこうして、Brief an Varignon. In: G. W. Leibniz, *Hauptschriften zur Grundlegung der Philosophie*, überst. v. Buchenau, hrsg. v. Cassirer, Hamburg 1966, Bd. II, S. 559, 560 の GP. VI 321, 拙著『世界と自我——ライプニッツ形而上学論放——』創文社、一九八七年、第 II 部三章四節を参照された。
- (7) 自然法則の妥当性の問いに満足せず、理性の「統制的」または「仮説的」使用により、個体の内的目的性を認識しようとする議論が、「判断力批判」への展開に他ならない。
- (8) 上原専録「ライプニッツの歴史研究」(一九五五) 上原専録著作集第三巻、評論社、参照。

- (9) 峰島旭雄「比較思想学の課題——比較思想を超えて——」『比較思想研究』一七号、一四頁参照。
- (10) Vgl. GP. VI, 121f. 酒井、前掲書、二〇六—〇九頁参照。「形而上学的悪」とは、およそ被造物がその「不完全性」のゆえに、必ず「バースバクティヴ」または「位置」というあり方をとらざるをえず、このことが「欠如」つまり「悪」の実質であるこの謂いである。
- (11) Vgl. H. P. Schneider, *Denker oder Lenker? Leibniz zwischen Einfallstreichen und Erfolgsdrang*. In: V. Internationaler Leibniz Kongress Vorträge, Hannover 1988, S. 869.
- (12) Vgl. E. J. Atton, *Leibniz A Biography*. Bristol 1985, p. 251ff.
- (13) Vgl. Paul Eisenkopf, *Leibniz und die Einigung der Christenheit*, Paderborn 1975, S. 225ff.
- (14) G. W. Leibniz, *Novissima Sinica*, hrsg. v. Deutsche China-Gesellschaft, Köln 1979, S. 8.
- (15) A. キルビヤー (1602—80) の中国学がライプニッツに及ぼすすれば、この点であらう。
- (16) 新田義弘「世界のバースバクティヴと知の最終審——現象学と近代思想——」(講座「現代思想」一、岩波書店、一九九三年、三—五頁) 参照。
- [附記] GP. = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*, 7 Bde. Hrsg. v. Gerhardt. Berlin 1875—90. Nachdr.: Hildesheim 1978.

(ついでに、きよし、哲学史、岡山大学助教授)